



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題圖

第 120 卷



南瀛佛教會會報

全國圖書館文獻縮微復制中心

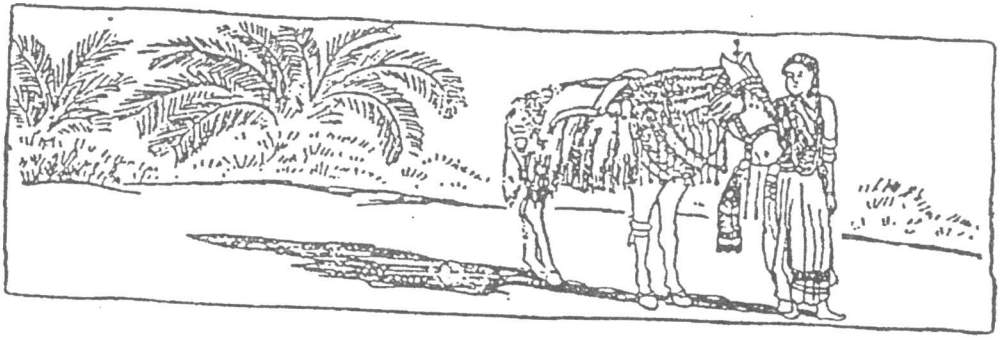
NANEIBUKKYO

XV 10



號 月 十

行 發 會 教 佛 瀛 南 本 日 大
北 臺



次 目

▲卷 頭 言	一
▲銃後國民の覺悟	中根環堂 二
▲臺灣の宗教と本島人の信仰	增田福太郎 五
▲金銀紙に就て	張 坤 良 一〇
▲お會式と十夜	西岡英夫 三
▲教 布 資 料	二七
▲譬 喩 集	三
▲吾人の釋尊觀	升 田 榮 二六
▲文學に生きる道	吉江喬松 三〇
▲笑 話 集	三二
▲教 化 資 料	三五
▲近代日本高僧略傳	曾 景 來 三三
▲流行語辭典	四
▲寺廟祭神調	五一
▲南 瀛 詩 壇	五五
▲會 報	五七
▲懸賞短歌競技會	...

銃後國民の覺悟

哲學博士

中 根 環 堂

この度の北支事變の起つたのは、支那が過去三十年來一日の如く排日抗日思想を鼓吹し、排日抗日といふことをモットーとして、日本に敵對行爲をすること、それが所謂支那の愛國行爲であるといふ風なことを吹き込んだ、その結果、今日の不祥事となつたのであります。これは社會主義、共產主義等の世界攪亂政策がゲツと奥迄喰迄んで、かやうになつたといふことは勿論でありますけれども、更に〇〇〇が某國の將軍を軍事顧問として聘した、その時その將軍が、〇〇〇の問ひ「如何にしたならば支那の軍備を完全にすること出来るか」に答へて「それは飛行機、或はタンク或は大砲のやうな武器といふものは絶對的のものでない、それよりも〇〇人と見たならば敵と思へ、所謂〇〇に對する敵愾心を起させて支那の人心を統一一致して行くこと、これが國防の第一である」といふ秘策を授けたことを銘記せねばなりません。それから〇〇〇は排日侮日抗日思想をだん／＼國民生活の上に教育の上宣傳の上に鼓吹したのであります。これが今日の結果となつたのでありますから、今日〇〇と事を構へるといふことは將〇〇初め要人達の間に於ては不利であるといふことは承知であらうけれども、今日に至つては國民が聞きません國民が許しませぬ。であるから、どこ迄も所謂〇〇と事を構へんけ

ればならぬやうになつて來た。従つて支那の方に於てはどうであるか、言を左右に托して日本に油斷をさせる、約束を守るやうな顔をして日本に油斷させて、その油斷に乗じて暴戻侮慢、さうして惡逆無禮なことをしたといふことは、通州の痕跡に於て明かな事情であらうと思ひます。

斯様にして、賣られた喧嘩ならば、我が日本としても買はずに居ることは出来ない、買はなければ日本男子としての顔が立たない。が、しかし、日本にとつては喧嘩ではありません、喧嘩ならば兩成敗であります。がさうではない。所謂日本のは喧嘩ではなくして、數へ導いてゆくのであります。即ち、所謂東洋なのであるから、東洋の平和を確立して行く上に於ては、日支兩國が互に相親んで利害を共にして行かうではないか、手を携へて行かうではないか、今更ら西洋人の御厄介になる必要はないぢやないか、共に仲好くしてゆかうといふのであります。然るにこの日本の慈愛のこもる親心を知ることが出来なくて、共產主義或は軍事顧問たる某國將軍の言ふことを聞き入れて、どこ迄も抗日侮日を致したといふことであります。どう我々が教へてもその親心が分らぬ。これは慈愛のこもれる母親が如何になんと言ても言ふことを聞かない不良少年の息子、己むを

得ず涙をふるつて最後にボンと一と打やるのと同じであります。この一と打やるのは何のためであるかと申しますと、それは決して憎い故ではない。不良とは云へ、可愛い子供に還ひたいのであるから、何とかしてよくしてやりたい、それで言ふことを聞かぬと一と打するのであります。この一と打が今の日本であります。然るにこの慈悲の鞭を振上げた日本よりこの慈悲の鞭を受けた不良少年の方が強かつたらどうでありますか、唯強いのみならず、それ以上の不良少年がその隣りにゐて、これと提携してこの振上げた鞭を折るやうなこともなきにしも非ずと考へられる。こゝに於てか我々日本國民は一致團結、協力一致、國民總動員をして、大いに緊張して振らなければならぬといふことになつて來ることは、私が申上げる迄もないことでもあります。それかと言つて、我々日本人は騒ぎ立て、サアこれでは大變だと言つて皆が第一線に立つ譯には行きませぬ。それでは我々は一體どうすればいいか。統後にあつて、第一線に立つ人々に對して、後顧の憂ひをなからしめる、これが、我々のつとめであると信じます。餘り騒ぎますと、沈まずに済む船迄が沈むやうなことになるります。ですから、かういふ一大事の秋に於てはどこと迄も心を鎮めて、これに對し一つの信念を持つてゆかなければなりません。一つの信念を持つて行けば、如何なる所の惡事と雖も、如何なる所の黒黨もこれを打越へ、これを切り刻いて行くことが出来るのであります。されば先づ統後にある國民はよく心を鎮めて各々の職分を全うし、各々盡すべき所の本業に向つて整して騒がぬやうに信念を固めて行くことが肝要であります。本當の眞心がありさへすれば、如何なる百難も千難も打越へて行くことが出来るのであります。

昔から「思ふ念力岩をも通す」と申して居ります。これは支那の話であります。嘗て李廣將軍といふ弓の名人があつた。この弓の名人が或日山奥に行きますと、大きな虎が今にも噛みつかんとする勢ひをなして居る。山の中で一人虎に會ふたんだからこれは如何んせん、我が身命もこゝに谷つた。サア大變といふので自分の身に憶えの弓に矢を當て、ヒューツと引きました。引きますとブスツといつて虎の眉間に當つた。當つたけれども一つもその虎は動かない。これは不思議である。矢があゝの通りブスツと當つて居るのに、虎が一つも動かぬで居るのは命中しなかつたのであらうか、不思議なことであると思つて、だん／＼そばに寄つて行きますと、それは虎には非ずして大きな岩でありました。その岩が遠方から見たら虎のやうに見えた。その岩に矢がさゝつたのであります。そこで李廣將軍はこれは不思議である。岩に矢が立つことは不思議である。もう一遍やつて見ようといふので、再び元の所に戻つて來て、やつて見ましたけれども、次々にカチンと音がするばかりで矢が外れて行つてしまつたのであります。

さてこゝであります。これが人間の一心であります。最初通つたものが二度目にどうしてカチンといつて通らなかつたのでありませうか「思ふ念力岩をも通す」この一つの大信念があれば岩でも通すことが出来る。最初通つたのはなぜであるかといふと、岩といふことを忘れてしまつて、相手の虎と我れとが同一體になる。自分が射つとも射たぬとも考へぬ。本當に身命を賭してヒューツと矢を放したのでありますから、岩をも通つたのであります。二度目はどうかといふと、岩に通るのは不思議である、岩には通りはせぬ、こゝに二心、岩と我れとの區別があります。一寸通らぬ隙めさうといふ不純

な心がありますから、一旦は通つたが二度目には通らぬ。私共も本當に國家のためには我れを忘れる。謂はゆる、「殺私卒公」——私の身を滅してしまつて國家公けのために奉仕するといふことになつたならば、如何なることと雖も出来ないことはないといふ私は信じて疑はないのであります。

自分をなくするといふのは佛教で無我と申します。無我とはなんであるか、我れをなくする。我れをなくすることは、我れを滅してしまつて、我れを殺すことではない。我れといふ卑しい微い、俺れがといふ自分の利益さへ國れば他人はどうでもよい。自分が金儲けさへすれば、國家はどうでもよいといふやうな、さういふ微い我れといふものをなくしてしまふ。なくしてしまつて公けに奉ずる、さうなつた時にはどうなるかといふと、我れといふものが國家と一體になるのであります。

考へて御覽なさい、自分の一家でもさうであります。一家五人の家の内に一人病んで居る子供があるといふと、その病んで居る子供の爲めには一家の主人たる者は、自分が病んで居るよりも早く治してやりたい、早く立派にしてやりたい、全快さしてやりたい、といふ念が起きて来るのはこれは當然のことです。さうして一家の主人といふ者は一家全體が自分の人格の現れになる。女房と俺れは別である。子供と俺れは別である。俺れさへよければ女房や子供はどうでもよい考へは起きはしない。謂はゆる自分の榮枯盛衰は一家の榮枯盛衰である。かう考へて來ますと、自分の人格は一家と一體になつて來ます。

それと同じやうに、國家のため社會のために盡す所の誠心誠意、云ひ換へると、我れといふものをなくして、しかも國家と一體とな

る、これが無我であります。こゝでくると、一切の行ひに私心が無いから、自分の思ふ念力は必らず岩をも通す。かういふ覺悟が國民全體にあつたならばどうであります。必ずや今は超非常時である。かういふ超非常時に於いて金を儲ける時はない。そんなケチな暴利暴慾を貪る心を捨て、本當に國家のため、社會のため、自分の本分を盡すといふことになりますから、従つて、如何なる層に於てもまた如何なる人々も一致して、出動將士をして所謂後顧の憂ひなからしめるやうに死後を諱つてゆくこととなり、ついには結果をして國頭に收めることが出来るやうになるであらうと思ひます。

それでありますから、本當に國家を守ることに於ては、私共は一つの信念を作らんければならぬ。この信念が國家興隆の基であります。この信念はなんであるかといふと、所謂佛を信ずる神を信ずるといふ心にならんければどんなことがあつても本當に立派な行ひといふものは出来るものではない。

神を信じ、佛を信ずるとはなんであるかといふと、自分が神のやうな心になる、佛のやうな心になる。さうして社會、國家のために働くといふこと、それが佛教の信念の結果であります。自分が金を儲けたら、或は自分が利益したら、自分が病氣になつたら藥も飲まずに全快するといふやうな、さういふ慾の深いことばかり祈るのが、決して祈禱ではありませぬ、信仰ではありませぬ。正しい道に佛のやうな心になり、神のやうな心になり、さうして我れといふものをなくしてしまふ。謂はゆる滅私卒公——私を滅して社會國家公けのために盡すといふことに依つて、初めて死後國民のつとめが全うせられるのであります。

——(字面)——

臺灣の宗教と本島人の信仰 (三)

臺灣神職講習會に於て

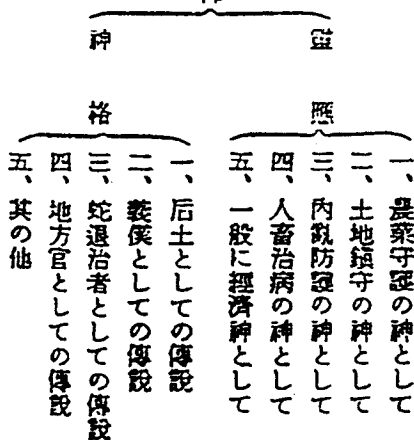
臺北帝大助教授 増田 福太郎

第二 土地公(福德正神)

本島人農民の生活と密接の關係があり、且つ其の信仰が農民に最も普及してゐるものとしては福德正神即ち俗に所謂土地公——單に土地とも書く——を以て尤なものとする。今日臺灣の街庄林野到處土地公廟(又は福德祠)があり、其の数は七百を越え、無名未登錄のものを合すれば數千になるであらう。其の祠堂の多いことは「田頭田尾土地公」の俗語があつて多數の譬に用ゐられてゐる程であります。

臺灣本島人の農村生活は、土地公の崇敬に始まつて今日に至つたものと云ふことが出来ませう。其の信仰は福建人、廣東人のみならず、熱帯にも及んでゐる。それに土地公は單に農業の神であるのではなく、人に福徳を與へる經濟神として、商家、鹽田業者、漁民にも崇敬せられ、又倫理及び警察にも關係の深い神等とされて居ります。

土地公の信仰



其一 臺灣の開拓と土地公の廟祀

臺灣の開墾と土地公の廟祀とは不可分の關係があり、臺灣各地に傳はる土地公の靈驗談を検するも、臺灣を開拓した移民の生活がまごころと映つてゐるのであります。

臺灣海峡の險を同じて渡來した移民は渡來後も到處處氣候風土の險惡に悩まされ、疫病と戦ひ、又殺人擄頭を事とする兇惡の襲來を

撃退する必要があつた。この生活と生命の危険が半面に於て著しく信仰心の緊張を來した。そして土地公に祈つて其の保護を受け、災害を免れんと希ふの情切なるものがあつた。即ち彼等の土地公に祈る所は土地の平安、農作物の豐穰其の他一切の幸福を獲ることであり、又一切の災禍を避けることであつた。

(一) 農作物の豐穰。農民は土地の財福を與へる神として、土地公を尊崇敬愛すること恰も子の父に對するやうなものである。今土地公廟の建立の事情を推察するに、茲に若し五穀豐穰數年に亘つて農民の財福が豫想外に増大した時は、之を土地公の福徳に歸し感謝の爲めに其の祠を建立するに至るのである。又、之に反し凶年相繼いだ時は土地公を祀らない爲めであるとして祠を建てる。されば歲の豐凶兩面に於て建廟の事情が存じたものと察せらるゝのであります。

(二) 臺灣の河川は山地帯が全面積の四分の三を占める爲め、一般に短く、容易に氾濫し又涸渇する。洪水溪流の氾濫及び旱天に際し、一方に於ては農作物との關係から排水及び降雨を祈り、他方土地の安泰の爲めに氾濫の防止を祈つた。其の他一般に交通運輸の安全をも祈つたのであります。

(三) 臺灣はもと三年小反五年大亂といはれ、住民は屢々匪亂及び分類械闘に悩まされると共に、番人にも絶えず脅かされ、時には佛國兵の來をもあつた。是等の内亂外患に對し土地公の靈威を傳ふるものが尠くないのであります。

(四) 臺灣は氣候風土の險惡なる瘴癘の地として知られ、醫藥機關不備なる故、住民は惡疫の流行、疾病の治癒に際しては神助に俟た

ざるを得ない。而も人のみならず家畜の疾病についても同様である。これらが、土地公に對する祈願の内容を爲すことが多い。

(五) 土地公は農業のみならず、一般に財福の神として商業者、漁業者、職業者の神として崇拜せられてゐる。人若し富を積んで家運の盛大を致したら、隣人は其の子に對してお前の父は福德正神である」と云ふことに依つても之を知ることが出来る。又鎮業に従事する者で巨利を博した場合には土地公錢と稱し其の幾分を獻納すると云ふことでもあります。

(六) 土地公は土地の鎮守の神として祀つたもので、街庄に在るものは其の街庄區域内を、田畑の隅端に在るものは其の田畑、各家に在るものは其の一家の域内を守護する。又墳墓に在るものは其の墓地域内を守護するものであります。

土地公が如何なる神であるか、即ち其の神格についての臺灣各地の傳説は興味の少からざるものがあります。

第三 媽祖(天上聖母)

天上聖母は俗に媽祖(又は馬祖)と云ふ。文章には封號を用ゐて「天后」と書く。中部支那から南部支那にかけて熱心に尊敬せられて居り、臺灣に於ては其の崇祀殊に隆盛を極め、全島に聖母を主神とする廟は三百二十廟に達して居る。それに、明末には琉球に傳へられ琉球にも天妃宮として二箇所祀られてあつたらしく、又、長崎に於ける支那寺として有名な福濟寺、崇福寺、興福寺等は媽祖を祀り、尚ほ、薩南片洲にも存してゐるらしい。今でも天妃の地名に造つて居る。當初には日本内地に傳へられ、現に常陸國茨城郡磯濱に

天妃神社、多賀郡磯原に天妃の祠ありと云ふことであります。

聖母は城隍爺と相並んで、現在、臺南在住本島人の民間信仰の兩大関である。舊三月二十三日に行はれる各地の媽祖祭は澎湖に於て土俗的香りの高い名物行事である。

聖母はもと海上の神、海難の神であつたが、今や、富能の女神として本島人の信仰厚きこと極まるものがある。

聖母の崇敬は對岸南支の傳統を承け繼いで居るから、先づ支那に於ける由來と盛衰をみる必要がある。

其一 支那に於ける祭祀と盛衰

聖母は支那莆田縣の林氏の女である。始祖は唐の林披にして、彼に九男あり、俱に賢である。憲宗の時に當り、兄弟九人各々州刺史の官を授けられ、九牧林氏と號した。邵州刺史禮公は其の一人であつて、六世の孫に州牧團公なる者あり、其の子保吉は五代周顯德中、統軍兵馬使であつた。時に劉崇自立の亂があり、北漢周の世宗は都檢趙匡胤に命じ、戰を高平山に督せしめた。保吉興つて功あり、後官を蒙て莆田縣の湄洲嶼に歸隱した。保吉の子平は世壽を承襲して福建總督となり、平の子惟慈は都巡官となつた。惟慈は即ち聖母の父である。

惟慈は王氏を娶り一男六女を孕む。聖母は第六女である。二人は餘かに善を行ひ、施濟を樂み、深く觀音大士を信仰して居た。父年四旬餘、つねに一千の單弱を念ひ、朝夕焚香、天に祈つて吾胤を得て宗嗣とすることを願つた。即ち齋戒して觀音大士を膜拜し、「我等夫婦が競々として自ら持し、徳を修め施を好む所以のものは致へて妄りに求むる所あるが爲ではない。惟だ冀くは天此の至誠に應

み、早く佳兒を賜ひ、以て宗統を光やかしたまはんことを」と祈つた。是の夜王氏夢に觀音大士の告げを聞くに、「爾の家は世々善行に致く上帝の賞し給ふ所である」と、乃ち丸藥を出し之を示して曰く「之を服せば當に慈濟の賜物を得るであらう」と。遂に振む。二人私かに喜んで曰く「天必ず我に賢嗣を賜はん」と。翌年、宋太祖建隆元年(西紀九六〇)庚申三月二十三日夕刻、一蓮の紅光西北より室中を射、晶輝目を穿ひ、異香氤氳として散ぜず、忽ちにして王氏腹産し、即ち聖母を寢室に生む。里隣みな異とした。父母は女子なりしを以て大いに失望したが、誕生の頗る奇なる故、甚だ之を愛した。生れてより彌月になるが泣聲を聞かない。依て命名して默とい

つた。默娘は幼にして聰明、諸女に類せず、甫めて八歳、塾師に従つて訓讀を受け、悉く文義を解した。十歳にして淨几焚香を喜び、誦經禮佛、且暮未だ少しも懈らない。婉婉の季女、儼然として窈窕のうちに傑型があつた。十三歳の時、老道士玄通なる者其の家に往來し、聖母は之に喜捨してゐた。道士曰く「若し佛性を具ふれば度入して正果を得るであらう」と。乃で玄微秘法を授けた。聖母之を授け、悉く諸要典を悟る。十六歳の時、井戸を襲つて符を得、遂に靈通變化、驅邪救世、屢々神異を顯はし、常に雲に駕して大海を飛渡つた。衆賢して通賢靈女と云ふ。其後十三年にして道成り、白日昇天した。時に宋雍熙四年九月九日である。

聖母は昇天してから屢々靈異を顯はし、莆田縣一帶の人民から尊信せられ、里人等は遂に祠を建てて之を祀つた。支那の宗教行政の慣例によると、新しい神が一地方の人民から非常に尊信されて居る

場合には、地方官から其の靈驗を具して朝廷に奏上し、朝廷より四額、稱號、封號を賜はる。即ち褒封であつて、之は其の廟を公認した一形式と見ることが出来る。聖母の名が朝廷に附えて此の形式を取るやうになつたのは、昇天後百三十五年を經た徽宗の宣和四年であつた。

其二 臺灣に於ける崇敬

臺灣の市街に到る處に媽祖廟があり、媽祖を從祀配とする廟があり、又各民家に於ても香火を供せるものが多い。

聖母に對する島民の信仰は今日では密に船乗りや貿易商だけの守神でなく、農民其の他の一般の民衆が一齊に無病息災其の他一般の現世利益を祈つて居る。聖母の崇敬は臺灣では既に鄭氏時代に臺南に天后宮の建立を見て居り、此の島に於ける本島人社會と其の始めを同じうして居る。加之、本島人社會の發展に伴つて信仰も普及して其の靈驗談の如きも他の諸神を抜いて遙かに多い。まことに聖母は本島人社會發展の一大原動力をなしたものであり、本島人の宗教思想の特質が極めて鮮かに、縮小されたまゝ媽祖の崇敬に於て現はれて居る。

臺灣に於ける媽祖の靈驗

- 一、海難守護の神として
- 二、一般商業の神として
- 三、匪亂防護の神として
- 四、治病の神として
- 五、祈雨の神として
- 六、萬能の神として

第四、其の他の祭神

其一 道教系の祭神

(一) 元始天尊は天の神で天地に先立つて生じ、初めて萬物を化設したる至上至高の神であり、天の玉京に居るを以て玉皇上帝俗に天公とも云ふ。民族的信仰の中心點であり、一般に畏敬されて居るから靈驗等に利用されることはない。大正十四年岡山郡の某家から火が出た。然るに出火の数日前二匹の犬が屋根に上りて天に向つて吠えたので之は天公の仕業であるとして附近の者は少しも火元を恨むことがなかつたといふ。天公は敬天思想に基くので最上の神であり、年末は諸神は上天して天公に神務を報告することになつてゐる。

(二) 三清天尊は初一氣の三に分れたもの。

(三) 三官大帝は三界公とも云ひ、天官地官水官の三である。

(四) 太上老君は老子であり、

(五) 張天師は特に張道陵のことである。

(六) 玄天上帝は上帝公とも云ひ、北極星を祀つたもの、人間の神として主に肉屋に祀らる。然し現在の信仰は變つてゐる。

(七) 九天玄女、金屋の神である。

(八) 法主公は法力の大なる神として祀らる。張姓である。

(九) 保生大帝は大道公又は吳真人と謂はれ、醫神である。

(十) 臨水夫人、三奶夫人は共に出生、出産の神である。但し註生娘々は俗信仰とも見るべき格の低い神である。

其二 儒教系の祭神

(一) 孔子。

(二) 十二哲六十賢。

(三) 管官大帝は五顯帝とも云ひ、木火土金水の五行に則つたものである。

(四) 司命灶君。

(五) 盤古公。

(六) 五雷元帥は雷神である。

(七) 三山國王は廣東省の巾山、明山、獨山を神として祭つたもので、東人が渡來當時幸じたものと見える。此の廟の在る處には必ず廣東人の部落がある。

(八) 水仙尊王は海上の神である。夏の禹王が治水に功があつたから之を神として祭つたと云ふ。

(九) 廣澤尊王は福民の神である。

(十) 東嶽大帝は陰陽兩間に立つ神で、人間が陽間即ち現世で惡事を犯し發覺しないものには、犯者に對して疾病其の他の自然的の災禍を科し、生涯の順境に立つことを不能にさせ、生存中發覺しなければ死後に於ても死魂を捕へて地獄に送りて處刑させるといひ鬼民の恐れ敬ぶ神である。

(十一) 關聖帝君は關公とも云ひ、關羽のことである。關羽は三教に互つて尊崇されて居る。元は武神であつたが、佛教では文神として祭り、儒教では之を文衡聖帝と云ふ。佛教に歸依した神であるとも云ふ。櫻面をつけるのに關係あり、商業神としても崇敬されてゐる。

(十二) 境主公は俗説では城隍と同一種類に屬する神で、只城隍は城隍を有する郡城に祀り、境主公は城隍廟のない田舎の市街に祀つたものであると云ふ。而して之に土地公を加へて地理的管轄

を有する神としてゐる。すると其の幽冥界に於ける地位は、城隍爺—境主公—土地公の順席であり、恰も州知事—郡守—縣縣官吏の系統に似て居る。

(十三) 輪落靈官は王天宮とも云ひ、天上の靈である。

(十四) 靈安尊王は青山王とも云ひ城隍爺に似た神である。地方官とも云ふが變態的城隍爺である。

(十五) 保儀尊王は移民官である。

(十六) 西秦王爺は唐の玄宗皇帝のことである。

(十七) 田都元帥はその仕者と謂はれてゐる。

(十八) 文昌帝君は文昌星のことで文藝の神として讀書人の信仰する神である。

(十九) 呂洞賓は俗に仙公のことであり、儒教では程伯帝君と云ひ、佛教では文尼真君と云ひ、道教では妙道天尊と云つてゐる。等々。

其三 佛教系の祭神

觀音、釋迦、阿彌陀佛、藥師佛、彌勒佛、地藏王、蓮花、羅漢、祖師公、定光古佛等。殊に寶教系として釋祖師、般祖師、姚祖師、王祖師等。

其四 雜教系の祭神

王爺、有應公、大衆爺、水流公、註生娘等。
(未完……文責在記者)



金銀紙に就いて (其の三)

張 北 張 坤 良

前號蔡倫の急報を聞いて走せ發した親戚友人が此様子を見て半信半疑に立籠つてゐると七日目に蔡倫が蘇生つて棺桶から起上り一同に向つて自分の死後の經過を婉曲に説き自分の考案した金銀紙の用途と效能を納得するやう一同に暗示を與へ感服させたのであります。斯の如くして蔡倫は大いに當時の大家の射倖的心理を良く捕へて此説を立て産業政策と教育方面に力を注いだのが金銀紙の始まりだと傳へられてゐるのです。

次に在家佛教即ち齋教龍華派の經典五部經顯正破邪にある「蔡倫造紙現塵沈淪」と科儀歸依科文に「歸依以後誠不化馬志不焚帛」とある事ですがそれは唐の時代蔡倫に依つて始まつた、此金銀紙が約千年も傳はり傳つて明の時代に至り遂に金銀紙に模む迷信的行爲が一般民衆の信仰に多々あると佛教徒が正信の行動に缺けてゐる點から齋

教龍華派の開祖羅因が當時の佛教徒があまりに厭世的思想と獨善主義に身を耽けてゐるのに飽き自から信仰の舊教を破つて同志の者に自分の所信即ち信仰の目標は御釋迦様であつて吾々信者は何時も御釋迦様の教から遠ざかつてはならんと高調し躬からその範を示したのであります。

開祖羅因の思想はどう云ふ思想であるかと云ふと丁度我が國の鎌倉時代佛教徒の心理は殆んど他力本願で自力更生する根氣がなく常に僧侶の境遷を羨む異に佛陀の教を有難く思つて歸依したのでなく單に出家すれば當時の幕府から一切の税金が免除される其上信望も高まると云ふ自己の利益から出發した故日本國中到處に此種の僧侶が殖えて來た此世相を見て日蓮上人は日本國民に愛國心が薄くなつたのを憂ひ直に街頭に立つて「念佛無間釋天竺真言亡國釋國賊」と高唱して今迄の佛教徒の行動を排撃

し一般民衆に愛國思想感謝思想と云ふ大無畏の精神を喚起して正信の念を鼓吹した事と同様に齋教龍華派の開祖羅因も支那明朝當時の佛教徒が徒に厭世的思想と獨善主義に走つてゐるのを打破せんが爲めに「御釋迦様の説かれた西方十萬億土の極樂世界は遠い／＼西の方にある世界でなくそれは現實の吾々が日常住んでゐる發摩非業を敢てする五濁惡世であつて吾々各自が責任を持つて奮闘努力して此娑婆世界を淨化してこそ極樂世界が實現し往生する事が出来るのだ」と教へ、尙且つ「佛在靈山莫遠求、靈山只在爾心頭、人々有個靈山塔、可向靈山塔下修」と云ふ偈を引用して吾々衆生には、生れ附き各々佛性を具有してゐるから、佛は何も遠い所へ行つて求めなくとも各自の心にある。それ故各自の心を是正すべきだと指導したのであります。そして又厭世的思想と獨善主義により生活様式が一變して現實社會から離れ、日常の接應を遠ざけんが爲めに今迄の寺院は皆山間邊地に建てられてゐるのを指摘して「吾々佛教徒たる者は娑婆世界を淨化して極樂世界にする責任者の一員である。如斯所以にさう減

茶苦茶に現實社會を呪ひ卑下し脱俗して深山避地に引籠り現實社會との交渉を斷てば極樂世界に往生することが出来ると思ふ事は間違つた考へである。人は心の持ちやう如何によつて苦となり樂となるのだから人々は佛の説かれた大無畏の精神を振り興しさへすれば極樂世界が實現するのだ。ですから吾々は何時もくよくよくせず朗らかに社會に進出し大衆に接觸せんばどうして行を磨き徳が積まれるでせう。」と云ひ更に「在家菩薩智非常、鬧市塵中作道場、心地若然無掛碍、高山平地總西方」と云ふ偈を引用して佛教徒の本分は責任を逃避し愛國心や報恩の念を喪失するやうな輩でなく大無畏の精神を具備し盡忠報國仁慈慈悲の念を持つた勇者でなくつてはならんと云ふ事を主張して今迄の山林佛教を在家佛教に換へ繁華な市街地に道場を設けて街頭に進出し主權精神の徹底を圖らんが爲に龍華派を創立して大いに四恩を説き責任感を高唱して行脚したのであります。

上述の如く羅因が信仰の目標は報恩に在つて極樂世界へ往生する道程も亦報恩に在ると高唱した爲め當時一般民衆の信仰の形

として寺廟へ参詣に行く事を燒金と云ひ施餓鬼のことを善好兄弟と云つたやうに神佛の德を慕ひ尊ぶると云ふ信念でなく一種の金儲けの對象物として此金銀紙を焼いて差上げれば自分の願ひを聴いて下さると云ふ孤獨的な觀念になつた爲め、其行動が當時の世相に逆ふと云ふ事になつたのであります。それ故羅因の行動を一般民衆から幽微視され邪惡物扱いにされて時の政府に怒く申し上げる者があつた爲め遂に投獄されたのであります。

羅因が此法難に遭ひ獄中で著述されたのが所謂五部經なのでその中に顯正破邪の所は實に當時の信仰を矯正すべき點を擧げて力説した所です。就中先に述べた「蔡倫製造現塵沈淪」と云ふ所は專ら此金銀紙を排撃してゐるところなのです。その上此金銀紙を燒く習慣を止めさす實行方法として信者即ち佛教徒に歸依する者に對しては歸依した以上はどんな事があつても決して再びと金銀紙を焚かぬと云ふ佛に對する誓文「歸依以後誠不化馬志不焚帛」と云ふ一條の誓文を歸依科文に入れて徹底的に金銀紙を燒く習慣を打破したのであります。

これに依り金銀紙の歴史と起因が分り金銀紙が我が佛教と何等關係がない事は火を見るより明らかな事實です。依つて今日我が臺灣に於て本島人間尚ほ盛に金銀紙を燒く習慣が存在してゐるのは甚だ遺憾に堪へない次第であります。終りに際し小生の愚見として一言述べさせて頂き此稿を終らうと思ひます。

惟ふに吾々の日常生活は一日たりとも經濟から切り離すことが出来ません。俗に「人爲財死鳥爲食亡」と云つてゐるやうに吾々は朝早くから晩遅くまで毎日々々金儲けの事に就いて鵜の目の目と云ふ狀態です。それ故吾々は金錢の授受に際し百端だと云つて渡された一圓札の札束が九十九枚しかなくかつた場合不足の分を請求せずに黙つて受取りますか、いえ、決して百圓として受取りません、必ず其不足額を請求します。そうすれば今日吾々本島人間に尙ほ盛んに焼いてゐる金銀紙に就いて疑問が起さる筈です。

如何なる疑問かと云ふと前述の如く今日の金銀紙は昔と違つて形も多少變り紙質も非常に劣つて粗惡になり、枚數もいひ加減

になつてゐる點です。分り易く云へば一束百枚であるべき壽金の正味が只六七十枚、又一只二十枚繰りになつてゐる銀紙が僅かの十三四枚甚だしきものに到つては四五枚しかないのもあります。ところが吾々は皆平氣にしてゐる所が不思議なのです。それを吾々の日常金銭の授受に比しても明らかに分る事で必ず其不足額を請求されることです。さうなれば吾々が平氣で神や佛に一百二百と云つて差上た此金銀紙の枚数が事實に於いてかく多數不足してゐてはどんな結果を招くであらうか。言ふ迄もなくその

不足はつまり神や佛を驚き神や佛を欺むにば天罰が來ると云ふやうなことになる、それで此金銀紙を焼いて御利益を受けて貰へる處か反つて罰があたりやしないかと思ひます。

それ故小生は金銀紙に就いて前述の如く歴史に照しても今日の理論に合はしても種々不合理な點が多々あるのを見出しますから今日到る處盛に金銀紙焼却廢止の運動に相付つて一日も早く全島民が目覺て金銀紙焼却廢止を實行されん事を希望します。



十夜とお會式の話

西 岡 英 夫

(上)

威を逞ふした炎帝も、はや十月になると南に去つて、人々が喘いだ暑熱の苦も失せて、風爽かに氣も澄みて晴れて、秋の心地よさが味はれるやうになつて、暑熱から蘇

生の思ひをした人々は、野に山に楽しい秋を渡へる、南國の臺灣も盛夏の國と呼ばれる地でも、長い夏も過ぎて、短いながら秋に入つて、荻菊、白菊餅を翫へば、月明の夜千草に叩く蟲の聲も、夜長の灯に聞えて嬉しく、此處にも秋が島人に渡へられる。

この十月、我佛敎界では十夜とお會式の行事が行はれる。この兩行事は十月に行はれる佛敎界の行事中で、最も有名で最も盛大に行はれるもので、昔から今にまで、時勢の推移や世相の變遷の夥しいに拘らず永續され、時に盛衰はあるにしても絶えぬのみか、近來はいよ／＼盛大に行はれて居るのである。而して十月五日から十四日まで行はるゝ十夜は、淨土宗の一大法要であつて、同宗の各寺院では、何れも寺院相當な法要が営まれて、善男善女の參詣に、寺院は何處でも賑ふのである。會式は十月十二日、十三日の兩日に行はれる日蓮宗の一大法要で、これは日蓮宗の一大法要であるが、會式と云ふのは、何も日蓮宗にのみ限つて用ひられるものでなく、佛敎の法會式と云ふことなのであるが、祖師と云へば日蓮上人を、門跡と云へば本願寺主を指して云ふが、これと祖師も門跡も日蓮上人や本願寺主には限つた名稱でないのが、一般俗間で恣う呼びなされた同一に、會式は佛敎法會式と云ふのに、會式を日蓮宗の會式のみに限られて居る、それほど會式、正しく云へば日蓮宗の會式は、有名でまた盛

大なるものである。而して兩者も他の佛教行事と同様に陰暦で行はれ、今も然る云ふ所もあるが、多く新暦即ち陽暦で行はれるのが多い、従つて淨土宗の十夜は、これを修する、日取は一定して居ないとも云へるが、多くは陽暦の十月五日か六日の何れから十日間修行されて居る。

十夜と云ふのは、淨土宗に於ける一法要で、日本全国各地に所在する淨土宗の寺院は勿論、その宗徒の間にも行はるゝ佛事の一つとして、昔から行はれて一般に普く知られて居る。以前陰暦に改まらない時代は、陰暦の十月六日から十日間、毎日晝夜登まれたものであつたが、今は陽暦は十月五日から十日間修せられるのが多いが、昔のまゝ唯だ陰暦でなく、陽暦の十月六日から十日間修せらるゝのも妙くないし、他の時日に行ふ所もあつて、一定しないけれども、大部分は十月五日から十四日まで十日間修せられるし、他の時日と云つても十月以外に行ふ所はない、それで寺院では十夜とか十夜講とか云ふが、一般宗徒間では俗に、お十夜と云つて、法要を發ねて、客を招き接應をする風習が行はれるが、寺院で

引證の誦經念佛を修するので、無量壽經に「於此修若十日十夜、勝於他方諸佛國土、爲善千歲」とあるに基き、十夜は即ち十日十夜の略稱であるが、俗説的に解釋すると、十夜と云ふのは、十夜念佛法要の略と云つて可い。

さて、この十夜とか、十夜講とか、或は俗にお十夜と云ふ、淨土宗での一大法要である佛事は、今から約五百ヶ年前、後花園天皇の御宇永享年中に、平貞國卿が菩提を弔ふ願念が殊の外深く、洛北即ち京都の北部に在る眞如堂と云ふ一寺に、三晝夜參籠して念佛誦經に三昧の後、佛陀の難有い靈夢を得て、念願が成就したと傳へられ、それが始めて眞如堂に參籠して誦經念佛に三昧、佛陀の御慈み聚るものが多く、參籠念佛することが盛に行はれたが、貞國卿が參籠念佛に三昧した時が十月であつたので、貞國卿は三晝夜の參籠で佛陀の靈夢を見られたが、その後は何時となく、雄略は十月なりとあつて、十月だから十夜の供養が可いと云ふことになり、十月十夜と云ふのから十日十夜、遂に十夜となつたと云ふ俗間の説もあるが、兎に角十夜の起源は、花園

天皇の永享年中、平貞國卿が眞如堂に參籠して念佛祈願された事實であると傳へられて居る。その後花園天皇には淨土宗鎮西派に属する。鎌倉の光明寺の九世の方丈源覺和尚を召せられ、宮中で阿彌陀經を講じせしめられたが、この時源覺和尚は眞如堂の衆僧と共に、引證の誦經と念佛を修せられて、今の十夜講の法儀の基を行はれた。それから六十餘年過ぎ、後土御天皇の明應四年三月に、觀覺和尚と云ふ淨土宗の僧で、鎌倉光明寺の住職であつた人が、この十夜の法儀、十日十夜間引證の誦經と念佛とを修する法儀を、それまで眞如堂で勤修されて來たのを、眞如堂から鎌倉光明寺に移して修行される。勅許を得たので、初め京都の眞如堂に行はれた十夜の法儀も、茲に鎌倉の光明寺に移行のことになり、爾來この法要は淨土宗の法儀として、日本全国の同宗寺院にて行はれるに至り、今日に及び而も盛大を見つゝあるのである。而してこの法儀に別時念佛が修せられるのは、引證の誦經と共に行はれる念佛を云ふのである。眞如堂で最初に修せられて、後に鎌倉の光明寺に移り、それ以來淨土宗の一法要と